

**取組実績の概要** 【2ページ以内】**1. ASEAN地域の主要大学との教育連携による人材育成の実現**

本事業では、日本とASEAN地域の主要大学が対等な立場で連携し、地域が必要とする人材の育成を目的とした「アジアの新出課題解決に向けたエビデンスベースドアプローチ大学コンソーシアム(University Consortium for Evidence Based Approach to the Emerging Issues in Asia 以下、EBA大学コンソーシアム)」を形成した。EBA大学コンソーシアムでは、エビデンスベースドアプローチ(Evidence Based Approach)スキルの体系的な学習を前提にフィールドにおける実践的教育を行い、データサイエンススキルと、パートナー大学の特色を活かし各分野における専門性を併せ持つ人材の継続的な育成を目的として、各大学における国際協力体制の強化、日・ASEAN大学間の意思決定の枠組の形成、共通カリキュラムの構築、国際プログラムの共同開催、学生の評価とそれに基づくサーティフィケートの授与等を実現した。

エビデンスベースドアプローチとは、フィールド分析と根拠(エビデンス)に基づいた問題発見・分析・解決手法である。近年のIoTやAIもしくはビッグデータの環境整備は、センサやネットワーク技術の向上により実空間から生み出される膨大なデータとその処理で実現され、産業分野を問わず複雑化するアジアの新課題の発見と解決を担える人材が重要となっている。そのために、高等教育においては、伝統的な学問分野だけでなく、学際、新領域、の教育とその更に融合した領域とリベラルアーツ教育の新しい力が必要となる。こうした状況を踏まえ、EBAによる問題発見と解決スキルを、幅広い学部、国籍、母語、宗教等多様な背景を持つ学生が、日・ASEAN地域のフィールドでデータ収集や分析といったデータサイエンスに基づくスキルを共に学ぶプログラムとして完成させた。また、日・ASEAN地域において活躍するため、地域の言語や文化に関する実践的能力の獲得も盛り込んだ。

EBA大学コンソーシアムの特徴は、経済だけでなく高等教育の統合が進むASEAN地域において、先発ASEANだけで無く、後発ASEANの大学が参加する事、パートナー大学の合意に基づいたカリキュラムが協同構築された点にある。全大学の代表者が参加する年1回の全体会議だけでなく、毎月の定期ビデオ会議での議論により教員間の信頼関係を築き、カリキュラムや運営方針を定めている。その結果、パートナー大学が、EBAのコンセプトを理解した上で、各大学の特性を活かしたアクティビティを学生に提供できた。参加学生は、言語・文化や宗教など多様性に富んだASEAN地域で、異なるバックグラウンドを持つ他大学学生と共に学び、地域の現状や複雑さを肌で感じ多面的に学ぶ場を体験した。コンソーシアム型の連携は、国ごとの制度や学事日程、教員間の意思決定に時間や労力はかかったが、複数大学で学生を育成する基盤整備の重要性が認識された。その結果、事業の後半では、計画数を超える学生の交流を実現した。

**2. EBAプログラム(カリキュラム)**

EBA大学コンソーシアムとして、パートナー大学の協力による共通カリキュラム「EBAプログラム」をデザインした。日本とASEAN地域における地域課題を「環境・エネルギー」「健康・公衆衛生」「防災・セキュリティ」分野に定め、各分野におけるフィールド学習を核にエビデンスベースドアプローチスキルを学ぶ科目を、各大学の特色や専門性を活かして開発した。EBAプログラムは「共通科目群」、「実践科目群」、「専門科目群」に分類される科目からなり、各大学内において開講される科目、ICT技術を活用しインターネット上で共有される科目、フィールドワーク等の全大学の履修者が集合する科目等、目的にあわせ多様な学習環境で提供した。

基礎科目群の、統計や数学といった既に各大学に設置され、また母語での学習が効果的な科目は、各大学内で既存の質保証により提供した。その一方で、学生発表を行う「EBAオープンセミナー」(隔月程度で実施)、フィールドワーク科目の事前学習、来日予定者への日本語科目等の実践科目群では、遠隔授業を活用し自大学内においても他大学の学生と共に学ぶ事を重視した。これは単一大学内では得にくい国際的な学生発表の機会、実際の当事国の専門家との議論、大学をまたぐ学生グループによるグループワークを日常的に実施できる環境として機能した。そして本事業の最大の特徴でもある実践科目群の「フィールドワーク」では、日・ASEANの課題発生地に学生が集合して学習した。本学では、水俣病の発生した熊本県水俣市や、環境保護重要地域である山梨県富士吉田市、自然災害とその復興を課題として持つ三陸地域等で本学の研究者が地方自治体や企業と協力し、ASEAN学生と本学学生がグループとなって学習する場を提供した。各パートナー大学も、それぞれの特性を活かしたフィールドワークを各国で実施した。各フィールドワークの前後には、フィールドでのデータ収集や記録方法、取得データの処理や表現スキルに関するワークショップを併設し、EBAスキルの定着を図った。追跡調査の結果、日・ASEANの学生にとって多様

性のある参加者による協業の経験は大変貴重であり、今後のキャリアにも大きく役立っていることが確認された。これら「EBAプログラム」として提供される科目は、各大学で単位認定され学位に繋がるだけでなく、EBA大学コンソーシアムにより発行される「コンポーネントサーティフィケート」として認定される。所定要件を満たすことで、卒業時に学部レベル・修士レベルの「プログラムサーティフィケート」を取得できる。各サーティフィケートには、科目名だけでなく具体的な学習内容/学習時間が記載されており、習得スキルの可視化が実現されている。企業等へサーティフィケートを提出する際にはオンライン上で内容が改ざんされていない事を証明し、学習履歴や能力をEBA大学コンソーシアムが保証する。サーティフィケートはこれまでに約560名が取得した。学生への追跡調査の結果、サーティフィケートは、学生の進学、就職活動において、貴重な学習経験の証明として有効に使われたことが確認された。

### 3. 学内制度改革の実現

本事業における新たな学生交流に対応する、学内制度を改善した。平成26年度より「協定学生」制度を定め、パートナー大学の学部生の短期来日時に本学の公式な学籍を付与可能にした。また遠隔授業で公式に授業参加が可能な、e-科目等履修生制度との併用により、フィールドワークの履修者が、帰国後の授業参加を続け、本学単位取得が可能となった。また、GPAの導入、クォーター制(4学期制)の開始等、本事業に必要な多くの制度改革が本事業期間中に実現したことにより、プログラム参加学生への便宜が格段に向上し、事業後半の計画数を上回る学生参加に繋がった。

### 4. 参加学生のキャリアパスとインターンシッププログラム

多くの卒業生が、EBA大学コンソーシアムの参加7ヶ国を1つのフィールドとして捉えた進学・就職実績が見られ、アジアをフィールドとした新たなグローバル人材の輩出を目的としたプログラムとしては望ましい状態にある。この7ヶ国は日・ASEAN包括的経済連携(AJCEP)国でもあり、教育・研究・就業のアジアを中核とした国際化を実現した。教育においては、卒業生は、アジアを中心に、アメリカ、ヨーロッパ、日本等、世界中の大学院への進学実績を有する。研究においては、学位取得後に大学で研究者としてのキャリアをスタートさせている者もいる。就業においては、アジア圏でIoT分野での事業展開を指向する企業に対し就業の場を求める学生が生まれた。特に、本事業が注力した企業でのインターンシップでは、多くの参加者を募ることを目的に、戦略提携する企業と協業し、オンラインとオフラインとを組み合わせたインターンシップの機会を学生に提供した。具体的には、本事業の期間中に約100名の学生が参加し、参加者中12名が日本企業からの就業提案を受け、うち10名が入社するという成果が生まれた。

### 5. EBA大学コンソーシアムの継続と発展

本事業では、日本とASEAN地域の大学の多様な学部がそれぞれ対等な立場で、伝統的な学問分野に留まらず学際的な分野における新たな、教育・研究活動をおこなうEBA大学コンソーシアムの構築に挑戦した。EBAプログラムをデザインする過程で、離脱や参加があり当初予定の大学とは異なるメンバーとなったが、最終的には全パートナー大学がそれぞれ積極的に意思決定に関与し、主体的にプログラムを実施できる強固なコミュニティが構築された。今後も本コンソーシアムは継続され、EBAプログラムに基づいた教育プログラムを提供する。本学では、平成29年度より本学湘南藤沢キャンパス(SFC)の2学部、分野横断的な学び支援の仕組み「パースペクティブ」が導入されるが、EBAプログラムは、そのパースペクティブの1つとして提供され、学部教育への組み込みが完了する。また、本事業で培われた実績は、大学と企業との連携による、フィールドワーク及びインターンシップの継続につながっている。

#### 【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	20人	16人	48人	36人	60人	55人	65人	65人	70人	65人	263人	237人
実績	7人	4人	14人	19人	4人	42人	67人	77人	89人	67人	181人	209人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

**特筆すべき成果（グッドプラクティス）**【1ページ以内】

本事業における特筆すべき成果を以下の3点にまとめる。

- マルチステークホルダーな人材育成コミュニティの形成

EBA大学コンソーシアムは、マルチラテラルな大学間の協力体制を形成しただけでなく、インターンシッププログラムを通じた産業界との連携、フィールドワークプログラムを通じた地方自治体との連携による、マルチステークホルダーな人材育成コミュニティとして成功した。このコミュニティを通して、日本とASEAN地域が必要とするグローバル人材を産官学の連携により育成している。

熊本県水俣市、山梨県富士吉田市、山形県鶴岡市といった本学との連携協力協定を持つ地方自治体や企業の協力により本学がホストしたフィールドワークプログラムは、ASEAN地域のパートナー大学から質の高い教育プログラムとして高く評価され、毎回多くの参加希望者を集めている。また、インターンシッププログラムを通じて企業との日常的な交流を持つ事で、産業界が必要とする人材像や具体的なスキルについて常に意識したプログラム開発がなされた。本プログラム参加者の就職実績は、産業界からの高い評価を反映していると言える。パートナー大学にとっても、日本の大学との連携だけでなく、ASEAN地域に進出する日本企業との交流による学生のキャリアパス多様化は、コンソーシアム参加への大きな魅力となっている。

- マルチディシプリナリー教育連携の実現

EBA大学コンソーシアムには、ASEAN地域の多くの大学が参加するだけでなく、本学からも3学部3研究科が参加し、学生の専門分野も多岐にわたっている。SFCの2学部1研究科は、その設立時から新しい社会創造を担う学際的な教育を行うよう設計されており、本学及びパートナー大学の多種多様な専門分野を持つ学生にエビデンスベースドアプローチという新たなスキル教育を実施するハブとして機能した。

本事業では、「情報」「工学」「経済学」といった多種多様なディシプリンを専門とする学生が、「環境・エネルギー」「健康・公衆衛生」「防災・セキュリティ」といった分野における地域の新出課題を通して、エビデンスベースドアプローチによる問題発見・分析・解決スキルを学習した。

本事業の特徴でもあるフィールドワークでは、ASEANもしくは日本の地域へ全大学の学生が一堂に会して学習する。座学や見学だけでなく、多様なバックグラウンドを持つ学生がグループワークを通して取得したデータから地域の課題の発見、それぞれの専門性の視点からの分析、グループとして解決にむけた提案を検討し発表する一連のプロセスを体験する。こうしたプログラムを通して、学生は自らの専門分野だけでなく同一課題に対する他のアプローチや共同での提案といったコラボレーションを体験している。こうした取組は、SFCにおけるマルチディシプリナリー教育の延長にあり、その質を高めるだけでなく、既存学部におけるマルチディシプリナリー教育の適用例としても成果をあげている。

- 大学の国際化への貢献と成果の公表

本事業を通して本学は新たに大学間の学生交流を実現するMoUをASEAN地域の複数の有力大学と締結した。さらに「EBA大学コンソーシアム」の設立に関するLoIをコンソーシアムパートナー大学と取り交わした。SOI-AsiaプロジェクトやAUN/SEED-NET等のこれまで研究者単位での連携や学部・研究科単位で実施されてきた連携が、本事業を通して大学間の全学的な連携に強化された。本学では、伝統的にアメリカ、ヨーロッパの大学との連携が数多く行われてきたが、本事業を通してASEAN地域の有力校との強力な連携体制が確立され、事業期間終了後も継続的な連携が実現する見込みである。

また、こうした大学間連携の強化を支える学内制度改革により、短期フィールドワーク等での学生受入時に本学学生としての身分を与える大学院向け「協定研究生」制度を学部生にも適用させる「協定学生」制度の制定、e-科目等履修生制度による遠隔授業での単位取得、国際基準に合致するGPAを用いた成績制度の導入、4学期制(クォーター制)の導入を事業期間中に開始もしくは決定し、全学を挙げての国際化を推進している。

本事業を通して得られた、これらの知見は、オープンセミナーやフィールドワークレポート等のオンライン公開、本学紀要の特集号における成果の出版、本学の研究成果発表会であるオープンリサーチフォーラムにおける展示やセッションを通して公表される。